

この話にはある男とその姉が出てきます。この姉は結婚しずこし田舎に子どもと住んでいました。男は町で妻と暮らしていました。兄妹を訪ねたりすることはありませんでした。町にいただけでした。ところが、彼の妻はよくない行いをしていたのです。彼女は夫を裏切ることをしていました。夫は料理するための食糧を持ってきていましたが、そしてそれらを使って妻は恋人にパンやら他のものを作ってあげていました。そして夫が帰ってくると妻は言いました。「聞いておくれよ、あんた。あそこに住んでいるあなたのお姉さんがあっちで屁をして空気を出す度にここの粉が全部ふっとんでしまうんだよ。私は残った粃殻で料理をするしかないの。だからこうしてカンズをかぶっているの。」その日も、翌日もそうでした。そして男は言いました。「今日は姉さんを殺しに行くからね。私に一体いつまで粃殻を食べると言うのだ。」そして彼は出かけて行きました。姉のところでは人々はずいぶんと長いこと会っていないおじが来て大変喜び、迎え入れました。しかし、彼は今日はこの姉を殺してやろうという思いを持って彼は来ていました。なぜこのようなことを彼女はするのだ。魔女に違いない。そこで彼は夜になって彼らが寝てから彼女を殺し家に帰ろうと待っていました。その日、姉は子どもたちがいましたが、食事の用意をして兄を待って彼の食事はふたをしておきました。男は言いました。「今日は疲れてしまった。食べたくない。」姉は彼に、ゆっくり休んで、そして食べたい時にはいつでも用意をするのでと言いました。そして姉が寝て子どもたちも寝てしまいました。起きると夫に言いました。「兄が起きてから食べるように。」その兄はというとみんなが寝てから仕事をするのを待っていたのです。そして、姉はというと兄が起きた時に自分は寝ていて食事を食べなかった(?)ということがあってはならないと心配で起きていたのです。彼女は隣の家のさじとしゃもじが集まってやってくるのを聞きました。子どもの話です。さて、彼らがやってくるとそのさじとしゃもじはその家のさじとしゃもじを呼びました。「おい、みんな。夜だよ、出かけようじゃないか。」さじとしゃもじには他にさじなどが一緒にいました(?)。「私たちは出かけられない。なぜならここの仲間の兄がやってきたんだが、その兄が彼女を殺そうとしていることを彼女は知らないんだ。」さて、姉は神のご加護があつてか霊が話していることを聞きました。「彼は彼女を殺しにやってきたのだ。」「なぜだ。」「なぜなら町にはその兄には妻がいるのだが、妻には男友達がいるのだ。食事は全てこの男にあげている。そして、夫にはこちらで彼の姉が屁をすると食べ物全てが飛んでしまうと言っているのだ。だから今日は妻が兄に彼女を殺してほしいのだ、喧嘩をせず落ち着いてくらせるように(?)。」彼は言いました。「なんと。ではどうやって助けてあげたらいい。」「私たちはどうしたらいいかわからない。ここにこうして彼女が起きて兄に食事をよそうのを待っているだけだよ。」「いや。この女性は庭に小さいヤギを飼っているだろう。私たちはあの子ヤギに魔法をかけよう。このヤギを兄に贈り物としてあげさせるのだ。この子ヤギの名は Sijaona (スワヒリ語で見ていないという意味)だ。では、この庭の子ヤギをあげるのだ。彼が持ち帰ったら妻はこのヤギに何かをするだろう。でもこの兄が来たら Sijaona に「今日、見た。」と言うように。姉は大変驚きました。「私が聞いていることは本当なのか。私は実際にヤギを飼っているが。」なんと男の方も眠りの中で同じことを聞いていたのです。座ろうではないか。彼は姉に言いました。「食事をしたいので用意してもらってもいいかな。明け方には出て行きたい。」そこで姉は食事を用意し、彼は食事をして話をしました。明け方彼が発する時、姉が言いました。「兄さん、このヤギをあげます。持って行ってください。このヤギには一つの秘密があります。ヤギを殺して料理していいですが骨は砕かないでください。肉だけをとって骨は皮と一緒にとっておいてください。Sijaona に「今日、見た」というとヤギが

立ち上がります。そして翌日また料理できます。また殺せます。だからヤギはあなたとずっと一緒にいるしあなたはいつでもおかずを食べられます。兄はヤギをもらって家に帰りました。彼は妻が何をしているのかわかりませんでした。上の方からの話声は聞いたのでした。男は妻に言いました。「妻よ、私は姉を殺してきたよ。彼女はもういない。そしてこのヤギを手に入れた。そして彼らがいうにはこういうふうにして彼らが骨を置いて Sijaona、「今日、見た」と言うのだ。するとヤギがメエと泣いてまた生き返るのだ。「へええ。」「へええ。」妻は言いました。「なんと素晴らしい。毎日、彼氏にこのヤギを料理してあげられる。」と言いました。さて、夫は仕事に行きました。妻はいつものようにパンを作りました。そして彼女はヤギを殺して土の窯のオーブンで料理するために中に入れました。夫はまだ帰ってきませんでした。恋人はすでにやってきて広間にいました。食事をしたいと思っていました。妻はオーブンの中で焼いていたヤギをとりに行きました。彼女がこのように屈むとオーブンにどんどんはまってしまい、くっついてしまい出られなくなりました。すると恋人の男が彼女を手伝おうとやってきて彼女の腰を引っ張ったところ、彼もはまってしまいそこにくっついてしまいました。そこへ隣の家の者が火種を頼みにその妻のところへやってきました。そして妻がオーブンの中に屈んでいるのを見ました。そして男性がその後ろのところを掴んでいました。服は全て脱げていました。その隣人は言いました。「なんと。ちょっと待った。秤を持ってきてこの大男の体重を量ってみよう。」彼は秤を持ってきて男に少しだけ触れていたところ、秤と一緒にくっついてしまいました。彼らは話すこともできないし、脱出することもできないし、大声をあげることもできません。そしてついに夫が仕事から戻ってきました。仕事から戻ってくると彼はその場にくっつき合っている人々の列を見ました。「なんと。」彼はオーブンのところへ行くとこう呼びました。「Sijaona、私は見た。」すると彼らは一気に落ちました。「さて、あなたはまず秤を持ってきて彼らの体重を量ろうとした、一体どういうことですか。」「いや、私は火種をお願いにただけです。でもこの人は服を着ていなくて。」彼は言いました。「もう行ってください。」というのも彼は関係がなかったからです。「ではお前、お前は彼に私の食事をあげていたのか。」「いや。」彼女は何も言えません。「もうこれまでだ。」顔は火で黒こげになり始めていました。さあ、今すぐお前とこの男はこの私の家から出て行くのだ。私は姉とその夫と子どもたちを連れてきて彼らと暮らす。というのも私はお前の行いを見るためにこのヤギを与えられたのだ。そして彼 [彼女?] は出て行きました。